

ドミニク・メルレ先生 *Dominique Merlet*

今年のピティナ・ピアノコンペティション全国決勝大会と福田靖子賞選考会で審査員にお迎えしたドミニク・メルレ先生。福田靖子賞選考会終了後にインタビューしました。先生の目には、日本のコンペティターたちはどのようにうつったのでしょうか？ヨーロッパと日本の違いとは？率直なご感想をお聞きました。

—— ピティナ・ピアノコンペティションのご審査、ありがとうございました。全体的な印象についてお聞かせください。

とても感心したのは、F級の生徒が皆とてもよく準備をしていたことです。G級はレベルの差が結構ありました。特級はとてもハイレベルで美しい音楽がたくさん聴けましたが、一つ気になったのは、全級を通して、出場者があまり楽しそうにピアノを弾いていないということです。舞台上に立っていても寂しそうで、あまり鮮やかな印象がありませんでした。もっとピアノを弾く喜びを聴衆に伝えるよう

に、もっと自由に表現し、もっと想像力をこらした演奏がほしかったです。とても上手な人はいましたが、中には先生に気に入られるためにただ忠実に弾いているだけのような演奏もありました。表彰式は圧巻でした。小さな子供たちがあれだけ大勢いるのは、ヨーロッパではこのような式典はまずありませんね。

また、今日の福田靖子賞選考会マスタークラスで聴いた男の子ですが、とても個人的な音楽解釈が豊かで、



P r o f e s s i o n a l
ドミニク・メルレ◎ピアニスト、EPTA 名誉会長、ナディア&リリー・ブランジェ国際親善団体会長

想像力もあって、お行儀の良い演奏の中にも個性があり、知性があり、面白い演奏をする生徒がいました。ヨーロッパの人々は演奏者の感情表現を重視します。

もう一つ問題なのは、「ピアノ」に集中する人が多すぎることです。オーケストラの作品や室内楽、歌曲などを聴いていないんだと思います。聴く時間がないのかもしれないですね。今日もマスタークラスでもっとピアノ以外の音楽に関心を向けて、様式のセンス、色、想像力を駆使する必要があると話しました。ピアノだけで弾こうとすると、とても貧しくなります。ピアノは、他のオー

ケストラ作品、歌曲、チェロやクラリネット、トランペットなど、様々なほかの音楽を聴くことで初めて面白くなっていくのです。他の楽器音楽を聴くと様々な違う色を発見できますよ。その辺りがもう少し日本でも浸透してほしいと願っています。

—— ヨーロッパの子供たちはどのような音楽教育を受けていますか？

昔に比べると、若いピアニストはだいぶ減りました。

子供の頃からそんなにやらないのです。両親が援助してくれることが大前提だからというもあり、また周りがピアノを弾くことをあまり強要しないからです。ピアノやヴァイオリンを弾くことは、一種の特別な贈りものなのです。誰でもやるものではありません。

—— 日本ではアマチュアも含めて、ピアノは多くの人たちが弾いているかもしれませんね。

アマチュアピアニストが活発なのは大変いいことです。聴衆のほとんどはアマチュアですから。ヨーロッパでは昔に比べてピアノのリサイタルが激減しています。オーケストラや室内楽はあっても、ピアノソロのリサイタルの数は少ないです。

わたしはリサイタルで演奏しますが、昔に比べて減りました。50年前には、各地に小さなソサイエティがたくさんありました。音楽愛好家のオーガナイザーがいて、コンサートを企画するのです。今ではそんなソサイエティも減ってしまいました。原因はTVや録音、DVDなどが発展したことによることが大きいのです。アマチュアピアニストも少ないですね。これは問題にもなっています。10年前は多くの音楽家は家で楽しく室内楽をやったり、コンサートに足を運んだり、お祭り騒ぎになったりしましたが、今は、例えば音楽をそんなに愛していなくても著名な芸術家のコンサートには足を運ぶというような、商業的なものになってしまいました。

—— そういった小さな音楽愛好家のソサイエティが支える社会をわれわれも目指していますが本家本元で減少しつつあるのは残念ですね。

例えばこの2日間レッスンを行って、客席で先生が真剣に楽譜を広げて一緒に勉強する光景が目立ちました。とても感心なことです。日本に来るたびに、音楽にたいする探究心の深さとコンクールの出場者の数と質に驚かされます。結果は満足行かない時もあるでしょうが。結果はともあれ、PTNAのコンクールはフェ

アで、いいですね。

—— 先生は出場者のこういったところを評価されているのですか？

私が興味ある生徒というのは、自分の心中に巨大な考えや想いを秘めている人、楽譜に忠実な人、そして人間的にも音楽的にも成熟した人です。速く弾くこと、華やかに弾くことだけしか考えない人がいますね。頭の中に作曲家の想いがちゃんと入っているのか疑わしい時があります。作曲家の思い、時代背景、文化、などなど。指、指、指ばかりで音楽に正面から向き合っていない人もいますね。福田靖子賞のマスタークラスで話したことは、文化を知ること、音楽的文化、一般的な文化。これが一番大切なことなのです。音楽は世界的、グローバルな文化なのですから。



—— 先生はEPTA (European Piano Teacher's Association) 名誉会長と、ナディア & リリー・ブーランジェ国際財団会長を務めていますね。

リリー・ブーランジェ国際財団はブーラン

ジェ女史の作品のエディションを援助する奨学金です。毎年6,7人に奨学金を与えます。

EPTAは国によって活発度がだいぶ異なります。例えば本部のあるイギリスはEPTAの活動が盛んです。フランスの現状はきちんと把握していません。私は名誉会長なので、直接的に関わっていないからなのですが、フランスやイタリアなどでは個人主義が強い国では難しいのではないかと思います。我々の文化を見るに、先生同士の繋がりというのはさほど強くありません。EPTAは世界中に組織が広がっており、定期的にワークショップやコンサートなど様々なイベントが開催されています。年4回「ピアノジャーナル」という雑誌が発行されており、インタビューや楽譜・録音の批評やコメントが記載されていて、大変興味深いですよ。